

『CKD と高尿酸血症の最前線～目まぐるしく変わる考え方～』

福井大学医学部内科学(1) 上田孝典

痛風・高尿酸血症の治療に用いられる尿酸降下薬の中でも、尿酸の合成を阻害する尿酸生成抑制薬については、長期にわたりアロプリノールの独壇場であった。しかし最近になり相継いで我が国で開発された新しいキサンチン・オキシダーゼ阻害薬が尿酸降下薬として実用化された。一つはフェブキソスタットであり、今一つはトピロキソスタットである。後者はその作用上の特色として **CKD** 並びにその関連病態についての有用性が報告されている。そこで今回痛風・高尿酸血症並びに腎臓病学の代表的研究者の御一人である帝京大学内科内田俊也教授より以下の講演を頂いた。

痛風・高尿酸血症は、近年男女共に増加しており、成人の約 3 割に高尿酸血症を認める。最近の疫学研究では高尿酸血症と心血管事故や腎機能低下との関連性を示す報告が多数認められている。

基礎的な研究においては、近年尿酸の輸送に関連するトランスポーターについて我が国を中心に貴重な発見がなされ、特に新しく尿酸トランスポーターであることが明らかとなった **ABCG2** は、腸管にも存在し、尿酸の腎外性排泄に重要な役割を果たしていることが示された。また日本人では **ABCG2** の遺伝子多型による機能低下により、見かけ上の産生過剰型高尿酸血症を示す例がかなりの頻度あり、この発見により従来有病型分類が新しく見直される可能性があることも報告された。同様に遺伝子変異により尿酸上昇を示す可能性のある **NPT-4** の存在も明らかとなった。

腎の病態に関しては従来は高尿酸血症と共に **CKD** の結果であると考えられていた、高カリウム血症や代謝性アシドーシスなどが、むしろ **CKD** の進行因子であるという興味ある事実等の最新の知見も明らかにされた。またこの様な **CKD** に合併する高尿酸血症の治療薬として、トピロキソスタットが尿酸低下作用並びに腎機能改善作用の両面で優れた臨床効果を示すことが報告されており、今後の臨床例の集積による更なる有用性の解明が期待される。